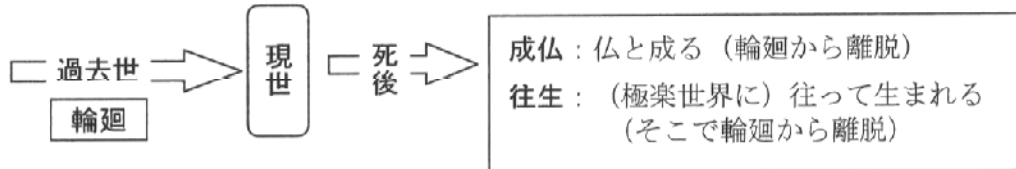


### ○日本仏教

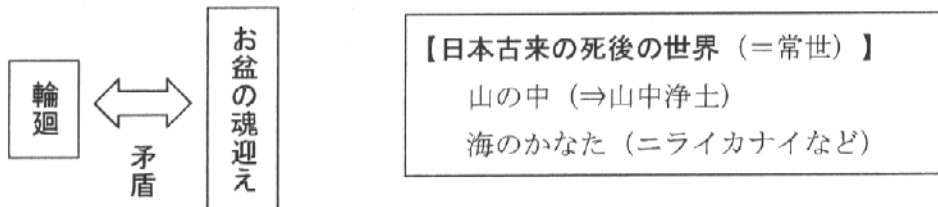
様々な思想・宗教の融合の上に成り立っている。

死後の世界観 ← 日本古来の死後の世界観

位牌・墓 ← 儒教



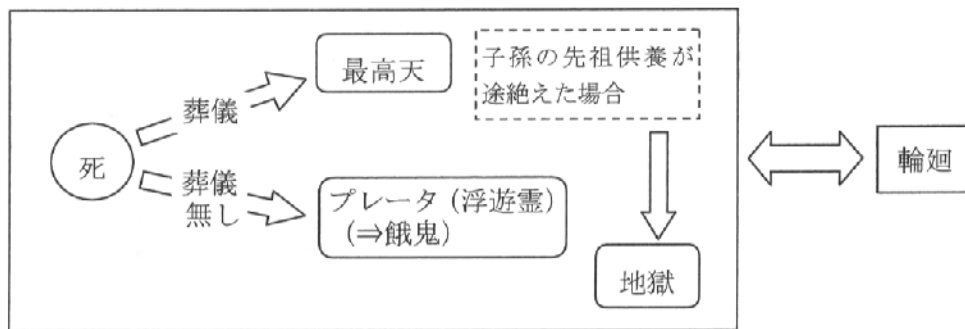
【輪廻（りんね）】生死を繰り返すこと



【儒教の2種の靈魂観（魂魄こんぱく）】  
魂：「云=雲」として説明させ、肉体を離れる純精神的な靈魂  
魄：「白=白骨」として説明され、肉体と結びついた靈魂

### ○インドの死後の世界観

日本同様二つの考え方が矛盾したまま並立している。



### ○インドの正統思想

「靈魂にあたるもの」（しばしばアートマンと呼ばれる）は永遠不滅。

輪廻の状態は、穢れなどに基づいて引き起こされる。

輪廻の状態は、「靈魂にあたるもの」の本来のあり方ではない。

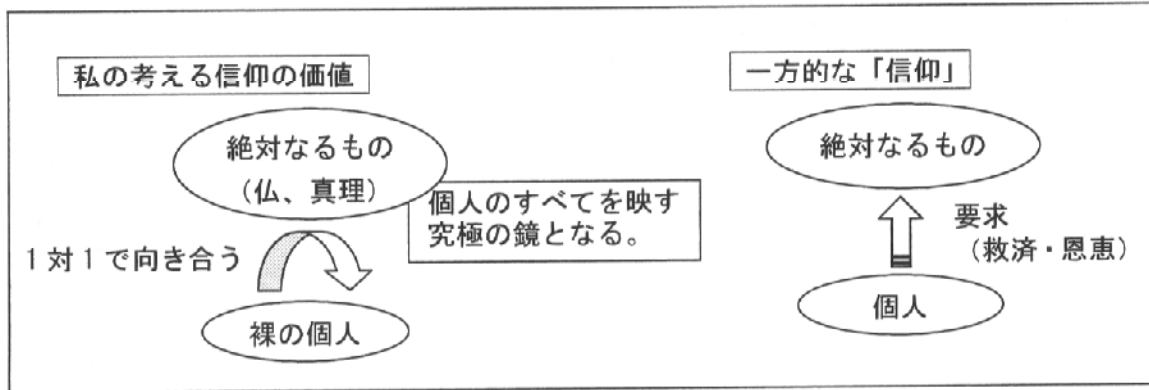
「靈魂にあたるもの」の本来の状態を回復できれば輪廻から離脱できる。

ヨーガの場合  
通常精神活動は肉体的なもの。  
通常精神活動をすべて停止させれば、アートマンが本来の姿を現す。  
死後に輪廻を離脱する。

○釈迦の教え

靈魂の存在や来世の存在などの「哲学的」な問題には関わらない。  
 「苦悩」の解決こそが重要。⇒「四諦」としてまとめられる。  
 (「毒箭(毒矢)の例え」：毒の処置が先で、射手等の詮索は急務ではない。)

釈迦の教えに反して釈迦の力による救済を求める人も多かった。  
 ⇒インドでは一般的ではない「遺骨崇拜」：仏舎利塔(ストゥーパ)



○七仏通戒偈 (『ダンマパダ(法句経)』183)

- 諸悪莫作 (すべて悪しきことをなさず)
  - 衆善奉行 (善いことををを行い)
  - 自浄其意 (自己の心を浄めること)
  - 是諸仏教 (これが諸の仏の教えである)
- 中村元訳『真理のことば・感興のことば』(岩波文庫)

三毒(三不善根) (宮元啓一『仏教法数辞典』すずき出版)

- 貪：自分にとって好ましいものを手に入れよう
  - 瞋：好ましくないものを排斥、回避しよう
  - 癡：真実についての根本的な無知
- 〔無慚：みずからに恥じず、慎みがないこと〕  
 〔無愧：他者に恥じることがないこと〕
- ⇒ 不善(悪)

○四諦(真実)

- 苦諦：一切皆苦……………病の症状
- 四苦：生、老、病、死
- 八苦：愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五蘊盛苦
- 三苦
  - 苦苦 (肉体的精神的苦痛)
  - 壞苦 (楽もそれが壊れる時には苦となる)
  - 行苦 (不苦不楽もすべて無常であって消滅変化を免れえないから苦である)

- 集諦(じったい)：苦の起こる原因は愛執である……………病の原因
- 滅諦：苦の止滅(苦の原因である愛執を滅ぼせば苦も滅びる)……………健康状態
- 道諦：苦の止滅に至る道(八聖道)(正しい実践徳目)……………健康に至る方法論

## ○四法印

諸行無常（あらゆる現象は変化してやまない）

行：様々な因果関係によって形成されるもの（有為）

諸法無我（いかなる存在も不変の本質を有さない）

我：「わたしのもの」「わたし」「わたしの自我」（無我：我執の否定）

一切皆苦（迷いの存在におけるすべては苦である）

永遠性をもたないものは「苦」と認定する

涅槃寂静（迷妄の消えた悟りの境地は静かな安らぎである）

## ○雪山偈（せっせんげ）（『大乘涅槃經』巻14）

雪山（ヒマラヤ）で修行していた雪山童子（釈迦の前世の姿の一つ）の道心をためすために、帝釈天が、羅刹（食人鬼）に変身して、この偈の前半二句を唱えた。それを聞いた童子は、残りの二句を聞くために、進んで我が身を投げて羅刹に施した。帝釈天は、童子の堅固な道心に感じ、これを空中に受け止め、地上に安置して敬礼した。

諸行無常（作られたものはすべて無常である）

是消滅法（生じては滅することを本性とする）

消滅滅已（消滅するものがなくなり）

寂滅為樂（静まっていることが安らぎである）

### 【物事の真実のあり方】

何か永遠であるものは、変化しない ⇒ 「有る」状態または「無い」状態を続ける

様々な因果関係によって生じるものは、「生じる」という変化を伴う

⇒ 自分と関わるあらゆるものは、変化し、消滅する

変化する以上、自分に属し、自由自在にコントロールできるものはない

### 【通常の意識】

好ましいことは永遠に続いて欲しい

好ましくないことは永遠に離れていて欲しい

### 【結果】

永遠性をもたないものに永遠性を求める ⇒ 現実に常に裏切られる ⇒ 苦

## ○いろは歌（仏教的勝利宣言の歌）

いろはにほへと ちりぬるを（色は匂えど 散りぬるを）

色（rūpa）：（狭義）視覚の対象、（広義）物質一般

わかよたれそ つねならむ（我が世誰ぞ 常ならん）

うみのおくやま けふこえて（有為の奥山 今日越えて）

あさきゆめみし ゑひもせず（浅き夢見じ 酔いもせず）

どのように魅力的なものであれ、我々が対象とする事物は変化・消滅する。

一体この世に永遠不変のものなどあるだろうか。そんなものはない。

因果関係によって成立するこの世の事象の中で迷い苦しむような状況はここに終わる。

真実に迷い、正しいものの見方ができないようなことは今後ありえない。

○キサーゴータミー (テーリー・ガーター註)

彼女は、まもなく、その夫に死なれた。『テーリー・ガーター』の一節のいうところによると、彼女は、その夫が「路上に死せるを見出した」という。さらに、つづいて、彼女は、その児の死にあわねばならなかった。天は彼女から一切を奪い去ってしまった。彼女がそう思ったとしても、すこしも不思議ではあるまい。

喪心。それがそのときの彼女の心情であった。彼女は死児をいだいて町をさまよった。彼女がブッダ・ゴータマに出会ったのは、その時のことであった。

「女よ、なにを求めてあるいているのか」

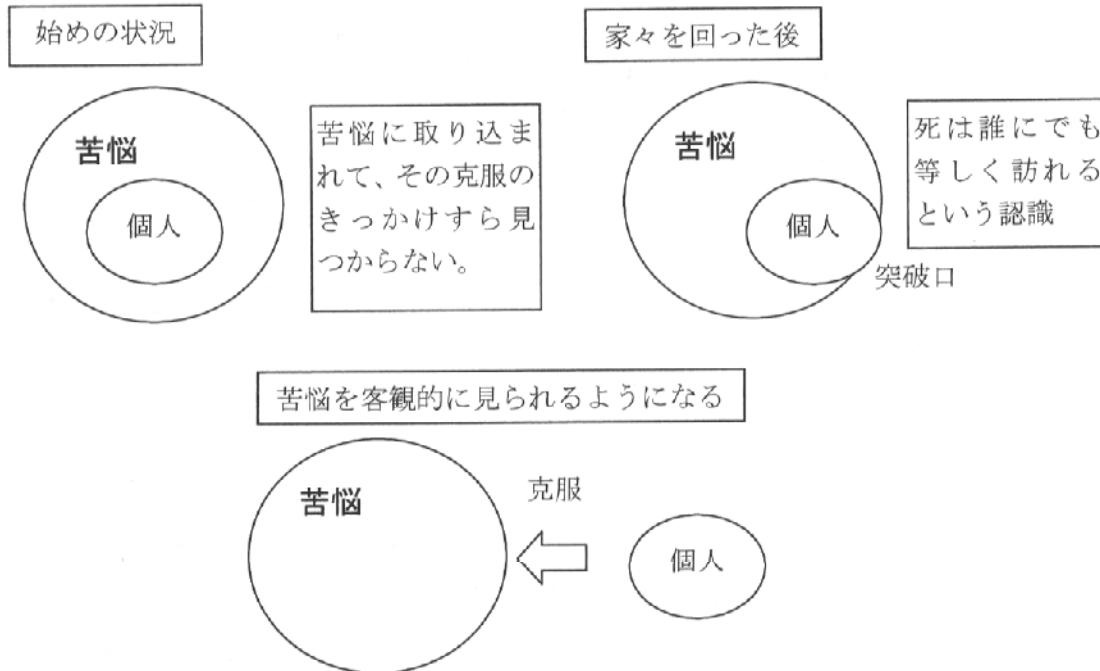
ブッダに声をかけられて、彼女は、

「大徳よ、この児をいきかえらせる薬がほしいのです」

といた。「では」ということで、そのときブッダが彼女に命じたことは、「いまだかつて死したる人なき家より芥子の種を貰いきたれ」ということであった。そうすれば、わたしが、汝のために、死児を蘇らせる薬をつくってあげよう、ということであった。

彼女の顔に生気がよみがえった。彼女は、その瘦身に鞭うって家々の戸口に立ち、おしえられたような芥子の種を求めた。だが、どこにいても、そのような消しの種はえられなかった。それもその筈であった。芥子の種を所蔵している家はおおかった。だが、「いまだかつて死したる人のない家」などという家庭はどこにもなかった。ある家では親をうしなったといった。ある家では子に先立たれたといった。彼女とおなじように、夫に死なれた妻もあったし、児をうしなったとって涙ぐむ母もあった。キサーゴータミーの足は棒のようになった。夕陽は西の地平線に没しようとしていた。その時、彼女は、はっと気がついた。いまだかつて死したる人のない家などというものは、この世のどこにもあり得ないということ。

増谷文雄『ブッダ・ゴータマの弟子たち』(現代教養文庫) 社会思想社



○四無量心

慈 (楽を与えること) (父)

悲 (苦しみを抜くこと) (母)

喜 (人の幸せを喜ぶこと) (友)

捨 (あらゆる事柄に対して偏りをもたない) (平等心)

「同じ」からスタートするか、「違う」からスタートするかは、大きな違い